

中央大学保健体育研究所講演会報告

日 時：2010年7月14日（水） 多摩キャンパス3115教室
演 者：石井 宏幸氏 松崎 英吾氏 田中 暢子氏
テーマ：「ブラインドサッカーから考える多様性
-スポーツマンシップとスポーツマネジメントの可能性-」

保健体育研究所では昨年度から、アダプテッドスポーツに関する講演会を定期的を開催している。2009年は車いすバスケットボールに関する講演会を開催し、充実した質疑応答が繰り広げられた。本稿では、2010年に標記のタイトルで行われた講演会の概要を報告する。なお、ブラインドサッカーについては、後期にも研究所「スポーツ医学研究班」の招聘で、松崎講師（本文末紹介参照）によるグラウンドでの実技体験会も開催した。

タイトルにもある通り、アダプテッドスポーツを通して考えるdiversity（多様性）や、困難な状況下でもいろいろな工夫をこらした企画を展開していく実行力等々、いままで晴眼者でも「見えていなかったものが見えてくる」機会を提供する有意義な講演会であった。なお、本文発言中の小項目と下線付は、報告者によるものである。

報告者：加納樹里(所長)

開会にあたり

【田中】学生のかたに障害者のスポーツ、「障害者スポーツ」といいますと、「障害者のスポーツ」という種目があると勘違いされていらっしゃるかたが多いのですけれども、障害を持っているかたに「あなたは何のスポーツをしていますか？」と聞きますと、例えば今日お越しにいただいている石井さんですと、「サッカー」とお答えになります。その答えの中に、「障害者スポーツ」という答えは返ってきません。もちろんこのシンポジウムの中で、障害者スポーツというものに関して関心を持っていただきたいということも、本当に強い思いとしてはあるのですけれども、もう一つ、今日このおふたりをお呼びしたことは、スポーツマネジメントという視点において、大変面白い取り組みをされていらっしゃる場所です。今回注目すべき点は、何となく皆さんが一般的に思っているネガティブなイメージというよりは、逆にその強みを持って、本当にスポーツマネジメントのあらゆる意味で本当に広く活動されていらっしゃる場所だと、私は感じております。

まずはおふたりを簡単にご紹介させていただきたいと思っております。まず、石井宏幸様です。日本視覚障害者サッカー協会副理事長でいらっしゃいます。皆様も、パンフレットをご覧になったかもしれませんが、28歳で失明をされたということです。ですから、学生の皆さんのお年ごろのときには、もちろん視力はあったかたですね。

その次にご紹介させていただきますのが、日本視覚障害者サッカー協会事務局長松崎英吾様でいらっしゃいます。このあとおふたりにマイクを譲りたいと思っておりますが、スポ

ーツという面白さ、サッカーという面白さ、そして先ほどもいいました、スポーツマネジメントという意味でのこの協会の大変面白い取り組み、これは皆様がこれから就職活動をされていくうえにおいても、非常に有効な視点をわたしたちは頂けるのではないかと、期待しております。それではまず、ブラインドサッカーといわれるもの、通称「ブラサカ」は、全く視覚の情報のないかた、多少視覚の情報があるかた、両方プレーされていらっしゃるが、どのような形でサッカーをやっているかということからお話を始めさせて頂ければと思います。石井さん、よろしくお願いします。

「ブラインドサッカー」の説明

【石井】 日本視覚障害者サッカー協会から来ました、石井宏幸と申します。ブラインドサッカーといいましても、B1、B2/3の2クラスでやるのですね。B1といえますのは、完全にアイマスクをした状態でプレーをするサッカー。中に鈴が入ったボールは、今はどこにありますでしょうか？ はい、このような音がします。「ちりんちりん」というよりも「かしゃかしゃ」と呼ぶような音ですね。このようなボールを使ってプレーをします。それから完全に、ここにもあるのですけれども、アイマスクをしてプレーをします。

ブラインドサッカーの特徴、先ほどもビデオが流れていたと思うのですけれども、ゴール裏にコーラーと呼ばれるコーチが立ちまして、選手への角度やゴールまでの距離、そのようなものを伝えて、選手がよりイメージを明確化して頭の中でビジョンを形成するような、そのような手助けをするようなポジションの役割をしたりする人もいます。声を出せるのは監督、それからゴールキーパーですね。ゴールキーパーは晴眼者（「晴れる眼に者」と書いて晴眼者、完全に見える人）がゴールキーパーをします。

その中で、このブラインドサッカーの特徴なのですけれども、両サイドにフェンスがあるのですね。高さ1メートルぐらいのフェンス、これがなかなか日本では普及していなくて、競技をやるごとに各地へ移動させなくてはいけないのですけれども、高さ1メートルの壁が両サイドにあって、ボールはフェンスを越えない限りインプレーでボールがプレーすることができるという、壁際でも激しい攻防が繰り返されている、そのようなスポーツになっています。

発症と競技との関わりの経緯

【石井】 それから私の紹介なのですが、現在日本視覚障害者サッカー協会で副理事兼、ウォーリアーズといまして、千葉の松戸でプレーを現在しています。失明したの28歳のときですね。今から10年前なのですが、ちょうどシドニーオリンピックをやっているところで、日本が南アフリカと戦って興奮し、手術後にもかかわらず立ち上がって喜んだという記憶があります。まず右目が網膜剥離をやっていて、見えなくなっていたのですけれども、その後、左目が緑内障と眼底出血で完全に見えなくなったという状況です。

もともとサッカーは大好きで、小学校1年からプレーをし始めたのです。草サッカーと

呼ばれるような、アマチュアのスポーツをやっていたのですけれども、見るほうも大好きで、「ジョホールバルの歓喜」を皆さん聞いたことがあると思うのですけれども、98年のフランス・ワールドカップの最終予選の第3位決定戦で、マレーシアで行われた日本対イランの試合でした。それに3日前ぐらいにツアーに申し込んで、1泊3日ぐらいの弾丸ツアーだったのですが、応援しに行った。そのあとフランス・ワールドカップを見に行ったり、チャンピオンズリーグを見に行ったりなど、そのようなこともしていました。あと、ウェンブリーですね、イングランドのサッカーの聖地と呼ばれているところも、見に行ったりもしていました。そのイングランドでスポーツマネジメントを勉強しようかなと、まず言語の学習をしようと思って学校を探していたのですけれども、ここにしようかと思って決めて帰ってきたころに急に視力が落ちて、そのあと見えなくなってしまったという状況がありました。

そのあと、ブラインドサッカーと出会ったのですが、インターネットを読み上げるソフト、スクリーンリーダーと呼ばれるソフトがありまして、今もコンピューターにインストールしているのですけれども、これがなかなか優秀で、ACMLとか読み上げるのでネットサーフィンをしていたら、視覚障害者サッカーと書いてあったのですね。「視覚障害者のサッカーって、何だろう？」と、視覚障害者にスタジアムでガイドするのかなとか、そのようなイメージで電話をしたら、「実は視覚障害者がサッカーをやるんですよ」、「どうやってやるんですか？」、「鈴が入ったボールでやるんです」と聞いて、非常に驚いたのですね。それで、主催者に電話をして、「関東でやらないんですか？」、「講習会は、しばらく関西のほうでしかやりません」ということで、関西のほうに出かけて、わざわざ行ったのが2002年1月、日韓ワールドカップの少し前ですね。そのころ、ブラインドサッカーの講習会に出会うことができました。

そこで感じたのは、やはりボールが足元にあればコントロールができるのですが、ちょっと離れるとボールがどこにあるのか分からない。そのあと自分がどこにいるのか分からないような、最初はそのような状況だったのですけれども、やっているうちに体の大きい選手(元柔道のパラリンピックのメダリスト)がいて、その選手とガツガツと当たることができたり、ピッチの中を自由に走り回れることができるようになり、本当に白杖をロッカーに置いてプレーに集中できるということに、ブラインドサッカーとの出会い、サッカーとの再会ができたということは非常に大きな喜びでした。

そして、練習試合を最後にやろうということでやったのですが、0対0で推移していたのですが、最後のほうにドリブルしてくるのが分かり、僕がカバーに行かなくてはいけない状況で前に踏み込んだのですけれども、一步遅くてシュートを打たれて、僕の右側をボールがすり抜けてゴールが入ってしまったのですね。これが非常に悔しくて、「もうちょっと、もう一步、中を詰めていたらコースが切れていたのになあ」と思いながら帰って行って、僕は忘れていた、スポーツ的な悔しさといえますか、もう一度チャレンジしてみようと、そのように帰りの新幹線の中で強く思いました。そのあとにブラインドサッカーにはまり

まして、関西に何度か出掛けてみんなと練習して、何とか練習試合もできるようになってきました。

ブラインドサッカー、そこで重要になるのはやはりコミュニケーションやチームビルディング、これが非常にキーポイントになってきます。コミュニケーションとは何かというのをのちほど説明したいと思うのですが、コミュニケーションやチームビルディングが非常に重要になってきます。

本当に、そのころ練習試合といいましても晴眼者を相手にやったり、日本にたった1チームしかないような状況で、5人制のサッカーなのですけれども、練習でも5人集まるかなとか、それぐらいの状況だったのです。2002年の5月に日韓ワールドカップを前にして、日韓で交流試合をしようということになりましたが、なかなか選手が集まらなくて、最初は大変苦勞をした思いがありました。

2002年日韓ワールドカップを前にして、向こうのソウルに行きまして、最初に韓国と練習試合を行ったのですが、最初の練習試合では確か0対4ぐらいで負けてしまったのです。それが非常に悔しくて、ホテルに帰って作戦会議を行って、どのようにしたら勝てるのかということをおもひで相談して、コンセンサスを得てプレーをしたのです。そのあとの本番の試合では0対0でなんとか韓国の猛攻をしのぎながら無失点で、僕はディフェンスをやっていて切り抜くことができたのですけれども、そのあとPK戦になって韓国は入れた。これはPK戦といいましても見えるキーパーがやるので、圧倒的にキーパーが有利ですね。その中でも韓国はPKを入れて、「次にはずせば負け」というところで僕の番が回ってきました。そこで、「こっちへけろう」と決めてけたシュートがうまく入って、ゴールすることができたのですけれども、次にけた韓国の選手がゴールを決めて、日本は最初の国際試合はPK戦で負けてしまったという、そのような経験があったのです。何よりも韓国とサッカーを通じて交流できたことが、非常に大きかったです。韓国の監督ともすごく仲良くなりましたし、非常にいい大会を開いたなと思いました。

そのあと、2002年の11月にIBSAカップというものがあまして、ここでは世界の強豪のスペイン、南米王者のブラジル、それから韓国、日本の4か国で、総当りのリーグ戦を行ったのですが、最初にスペインと当たって0対3、それから韓国に2対3の惜敗で、そのあとのブラジル戦がなんと0対7、非常に悔しい思いをして、本当に体をぶつけても体勢が崩れなくて、そのまま反転してシュートを打たれてしまうような、すごいポテンシャルを持った選手がいて、非常に驚いた思い出があります。

そこで帰り際、飛行機の中でずっと考えていて、「どうしたら日本は強くなるのかな」と、「どうしたら普及するのか」と、そのようなことが頭の中をずっと駆け巡っていました。そして、忘年会のときに、日本選手権をやらないかということで、みんなに声をかけたのです。日本選手権など、まだ日本に1チームしかないのにできないのではないかという声も最初はあったのですが、みんなでチームを作ろうというような機運が高まりまして、2003年の3月、翌年の3月ですね、本当に準備期間が4か月ぐらいだったのですが、日本選手

権を開催することができました。協賛活動や準備、英文のルールを全部翻訳したりなど、これは、僕がやりたかったスポーツマネジメントは実際目の前にあるのではないかと思っ
て、ここは本当に一所懸命やって、メディアへの対応や、どうしたらいいのかということ
を専門家に聞いて、プレスリリースの書き方なども教わったりして、みんなに知ってもら
おう一心でやっていました。

そこですごく大変だったのが、競技をやる場所ですね。これは非常に苦労しました。障
害者スポーツでもやれているところはあったのですけれども、こちらでは一般の人が入る
のは敷居が高いということで、僕はあえて一般のフットサルの施設を探して、そこでやる
ことにしました。そうすれば、横でやっているプレーヤーが、アイマスクをして何やって
いるのだろうということで見ることができるので、一般の、普通のフットサルの会場でや
ることにしたのです。その後、日本選手権を毎年開催しまして、現在B1チームが12チーム、
それから弱視のB2/3というチームが6チーム、現在全国で活動をしています。将来的には2
県に1個ぐらいの割合、40チームぐらいのチームができればなと思って活動しています。

就労と現在の課題

【石井】今までご説明してきた頃は、とにかくサッカーに夢中で、仕事のことを何も考え
ていなかったのですけれども、皆さんも就職活動中のかたもいらっしゃると思うのですけ
れども、視覚障害者の就労は非常に困難が伴うのですね。日本選手権が終わったあとに、
視覚障害者のビジネススクールのようなところに入りまして、1年間みっちり非常に厳し
いトレーニングを受けました。ワードで文書を作成して、レイアウトもきちんと整えて提
出できるような訓練、あとはエクセルで関数を覚えたり、VLOOKUPやあとはピボッ
トテーブルなど、そのようなことができるように訓練を受けてやったのですけれども、な
かなか就職が決まらない。今大学生に「就職活動をしているといっているけど、いくらぐ
らい受けたの？」といったら、「10社ぐらい」というとまだまだだなと思うのですけれど、
大体、100社受けました。そしてやっと就職がなかった。

最初は人材総合サービス会社に入ったのですけれども、そのあとご縁があって、日立コ
ンサルティングという会社に現在就労して、実はその後出向で、日本視覚障害者サッカー
協会に來ています。これはなぜかといいますと、NPOや非営利団体にとって、人材と資
金不足というのはやはり、なかなかうまくいかない状況で、最初は松崎さん一人だったの
ですけれども、やはりもっとマンパワーが必要だろうということで、日立コンサルティン
グから給料をもらいながらJBF A視覚障害者サッカー協会のほうで就労をするというこ
とができないまして、現在までに至っています。

それから、先ほども申し上げたのですけれども、ブラインドサッカーで重要なのはやは
りコミュニケーション。コミュニケーションとは何だろうということをよく考えまして、
それを可視化するようなワークショップを横浜マリノスと最初に開催しました。それはボ
レーの距離や名前を呼んだりとかそのようなことで、アイマスクをした人が安心して歩け

るようなワークだったり、四角形に組んだ盲人者がボールをランダムに投げて、アイマスクをした人が、何回ボールタッチができるかというゲームをやったりとか、コミュニケーションやチームビルディングなどをテーマにしたワークショップを開催しました。

そして、このレポートを書いて100社ぐらい回ったのですね。ブラインドサッカーはコミュニケーションが非常に重要だとか、ブラインドサッカーのエンターテインメント性など、商業的に協賛活動をすればもっとステップアップできるのではないかというようなレポートを書いてやったのですが、「これは本当に石井さんが書いたのですか？」と最初は疑われるようなこともあったのですけれども、最初にコンピューターを持って行って、デモンストレーションをしたりもしました。サッカーが本当に自分をステップアップさせてくれたと思います。

そのあとに、日本選手権などを開催するうえで大きい大会をぜひともやろうということで、アジア選手権を去年の12月に調布で開催することになりました。非常に準備が大変だったのですけれども、ボランティアもかなり多くの数が参加して来てくれたのです。参加国は5か国。マレーシア、それからイラン、中国、韓国、日本が参加して、今までのアジア選手権で一番大きな大会として、開催することができました。残念ながら日本は、中国に負けて2位だったのですけれども、世界選手権への切符を何とかゲットすることができて、今年の8月にイングランドのヘレフォードで行われる世界選手権に参加することになっています。僕も参加するのですけれども、選手への補助はあるのですけれども、僕は自費で行かなければいけないような状況です。

実は『サッカーボールの音が聞こえる』という本があした発売になります。表紙は『キャプテン翼』を書いて書いた高橋先生がかいてくださって、キャプテン翼のようなプレイヤーがアイマスクをしてシュートをしているようなシーンが表紙なので、本屋で見かけたら、僕の半生が描かれているので、ぜひごらんになっていただけたらと思います。本当に、ブラインドサッカーはいろいろな人が携わることができて、非常に多様性もあるのではないかなと思っています。

最後になりますが、ブラインドサッカー、間近で見ると非常にエキサイティングなプレーが伝わると思うので、ぜひ応援していただければと思います。

私からの話は以上になります。ありがとうございます。

ブラインドサッカーについて

【松崎】続いてわたし、松崎英吾といいます。この協会です事務局長という形で専任で、ここからお給料をもらって働いています。石井さんがすごく詳しいブラインドサッカーのことを話してくれたのですけれども、ブラインドサッカーのことを知っていらっしゃるかたは、どれぐらいいらっしゃいますか？ この講座の前に知っていましたという人。1人、2人、3人……大体10人ぐらいですね。わたしたちは統計も取っていて、2008年12月現在で認知度が30%ぐらいあります。昨年こちらに来た車椅子バスケットさんというのは、「リアル」

な影響だと思えるのですけれども95%ぐらい世の中で知られているという調査が出ていたりします。少し上ぶれて出ている気がするのですけれども、ほかの障害者スポーツは大体10%未満がほとんどですね。ブラインドサッカーは3位で健闘しているほうなんです、この後少し実際の映像をご覧ください。

ちなみに、この映像中の黄色いチームはブラジル。サッカーでも強い国、ブラジル、アルゼンチン、スペイン辺りがブラインドサッカーでも非常に強豪国となっています。ゴールキーパーは、高校までばりばりサッカーをやってきた人たちがやっているぐらいなのですけれども、このようにして点を取られてしまう。この試合で日本はブラジルに7対0で負けています。

僕らは普段、目から8割の情報を得ているといわれていて、サッカーのようなボールスポーツでは95%ぐらいが目から入ってくるといわれています。95%の情報がなくなってしまう状況下で、僕らでも止められないようなシュートであったり、動きであったりということを、どのようにして補完しながらやっているのだろうかということ、考えながらやっています。

実体験の時間

【松崎】そろそろ皆さん眠くなってきたので、実際に目に頼らない、8割の情報に頼らないで何かをする、ましてや走り回るなどということがどのようなことかということ、ちょっと体験してもらおうかなというように思っています。今から、2人組を作っていたきたいのですね。隣り合わせで2人、どなたでもいいのですけれども、ちょっと離れている場合3人でもいいのですけれども、作ってもらってもいいですか？

このゲームは、「ゲーム」といってしまったのですけれども、かわるがわる目隠しをしてやるのですが、ちょっとでも薄目を開けて画面を見てしまうと何も体験できないゲームになってしまうので、必ず目をつぶるという番の人は我慢してつぶって、絶対開けないようにしましょう。今からやるのは、2人組で片方の人がまずはペンか鉛筆と、白紙の紙、紙に書ける状態で目をつぶります。もう1人の人は目を開けたまま、今からスクリーンに映される図形を、もちろん目で見られるので、それを視覚に頼っていない隣のパートナーの人に、同じような図形をかいてもらうような形で、声の指示を出しながら図形をかいてもらうという簡単なワークですね。

はじめに書いてもらう図形は、このような図形です。制限時間3分です。

ではすみません、目を開けてみて、自分がかいた図形がどのようなになっていたか、確認してください。今やってみたかた、このようなところが分からなかったというようなことを、一言二言頂きたいのですけれども。

はい、普段目で見ると、この図形を0.1秒見ればかけてしまう図形。それが今、3分という短い時間の中で、すごく描くのが難しかったと思います。どこから始めていいのか分か

らない。「直角三角形」といわれても、どちら向きなのか分からない。垂線を下ろすときに、実はこれは二等分線なのですね。二等分線まで意識したかどうかは分からないのですけれども、「真ん中辺」といっても、「真ん中はどこだよ」という話だったりするのですね。

普段、僕らは本当に目で頼るとあつという間に分かってしまう情報が、今はすごく聴覚を意識してやっていると思います。今コメントを頂いた彼もそうなのですから、「不便だった」、「分かりにくい」ということが多分あると思うので、今度は立場が変わります。どのようにしたら相手にとって分かりやすい説明になるかというようなことを少し考えながら、次に交代してやりたいと思います。ちなみに、交代したあとの図形はとて難しいので、頑張ってください。では準備してください。

いいですか、目を開けないように。いきますよ。このような図形です。

はい、そろそろいいでしょうか。結構皆さん、往生際悪く頑張りますね（笑）。

1回目と2回目、これは何が違うか分かりますか？1回目も確かに難しかったのですね。2回目、何が違うかといいますと、実は円をかきましたね、皆さん。円をかいた中で円がつながるかどうとか、接点と接点がこれはつながっていますね。あとは円の中心と中心がつながっている。この始点と終点は非常に分かりにくくて、線でかけないのです。多分言葉でいうと、そこから右上のほうに30度ぐらいでまっすぐまっすぐ線を引いて、ちょっとずれているからもうちょっと上へいってというような、そのような指示もあったかと思うのですけれども、そのような指示だと多分、30分かかっても分からないものは分からない。

でも逆に、一番最初に先生も言っていたのですけれども、僕らは8割の情報を補完することがポイントなのですね。そのうちの一つが、音声情報。ほかに五感がありますね。視覚、聴覚、味覚、嗅覚、それから触覚。触る感覚というのは、結構情報量が多いのです、実は。例えば、接点から接点というのは、音声情報で話してもなかなか説明できないのですけれども、相手の手を「ちょっとお借りします」といって「ここまで線を引いて」という、「ここ」を一緒に指図してあげるだけで、その人は「ここからここまでなんだな」という線が引けたりする。

つまり皆さんに「声で伝えて」と言っていたので今の場合は反則なのですから、視覚を奪われたから、他のさまざまな情報を使う僕らは「音でやるサッカーだよな」ということをよくいわれるのですけれども、実は音だけではなくて、もちろん音声情報も重要。けれども触ったり、太陽の向きを感じたり、風の流れを感じたり、そのようなすべてのほかの情報を補いながら、たまには汗のにおいで分かるなどという選手もいるのですけれども、8割の情報をどのように補いながら、先ほど見ていただいたようなプレーをするかということが、ブラインドサッカーのポイントだったりします。言葉だけではない、どのように補完するか、というところを考えながらやっているスポーツだということですよ。

ブラインドサッカーの価値について

【松崎】先ほど石井さんの話の中で、失明もあったし、それをサッカーを通じて乗り越えてきた部分ということがあったわけなのですけれども、そのようなプレーヤーというのが私たちの組織にたくさんいるのですね。そのような人たちに、皆さんもスポーツをやっている人が多いと思うのですけれども、「なんでサッカーやってるの?」、「なんで野球やってるの?」と聞くと、大体皆さん、一番初めは「楽しいから」などと答えるのですね。「なんで楽しいの?」と聞くと、僕らの場合でいくと「サッカーだから楽しい、なぜならサッカーだから」、「なんでサッカーだと楽しいの?」というような、僕は「なぜ5」といっているのですけれども、突っ込んでいく形の質問をしてみました。選手70名、サポーター45名ぐらいの、全部で500以上の回答の中から、ブラインドサッカーの価値とは何なのだろうということを考えたのです。スポーツはどうしても勝つことが前面に出がちだし、僕らもちろん勝ちたいのですけれども、このように改めて聞いてみると、実は「勝ちたい」という答えはほとんどなかったのですね。500回答ぐらいある中で、「勝ちたい」という答えはたしか三つぐらいしかなかったのですね。

実際、プレーヤーへの質問から得られた「ブラサカ」の価値とは、大きく4つ挙げられます。

1番目にあげられる価値は、僕らは「自由系」といっているのですけれども、普段行動に不自由さがある、「電車に乗り遅れそう、駆け込み乗車しなきゃ!」という場面でも、危ないから。彼らに駆け込む自由はないのです。でもピッチの中であれば、自由に考えて、自由に判断して、自由に動き回ることができる。「ピッチの中は、障害を忘れられるとき」というのは選手の言葉なのですが、そこが一つブラインドサッカーの価値としてある。「ほかにもスポーツはいっぱいあるじゃないか」、そのように思うのですけれども、視覚障害者スポーツの中でも選手が勝手に動き回っていいよ、勝手に考えて、勝手にぶつかって、勝手に転んで全然いいよと許しているスポーツというのは、実は「ブラサカ」しかないのですね。この自由であることというのは、僕らにとってすごく、皆さんに伝えるうえでも、選手に伝えるうえでも、選手がプレーするうえでも大事な価値観だったりします。

2番目は、「サッカー系」といっている、新しいサッカーといっているのですけれども、障害者がする特別なスポーツがブラインドサッカーなのではなく、もともとサッカーはラグビーがスコアレスになるように、難しくなるようにということで、普段使い慣れていない足でやろうとってサッカーに発展していったという一説があるのですね。その結果1対0や2対0とかの少ないスコア、強いものが必ずしも勝つわけではないというルール、ギャンブル性ですね、が生まれたりしている。それをさらに難しくしようとして、アイマスクをつけてやりましょうと、皆さんもできるわけですね。アイマスクさえすればサッカーができる。より難しいサッカーなのだ。その結果、かわいそうな障害者がやるというよりも、自分たちはみんなよりもできないプレーをやるのが、すごく誇りになっている。そこが僕らの一つの価値だったりします。

3番目は、ちょっと「出会い系」などとキャッチに呼んでしまっているのですけれども、仲間作りであることという、障害者スポーツは歴史をひも解くと、障害者がリハビリの一環として、福祉の一環として取り入れられてきた歴史があります。それ自体はとても大切なことなのですが、障害者が、例えばブラインドサッカーでいえば、普通にサッカーをやっている皆さんのような人たちと出会う機会というのは、あまりなかったのです。それは活動する場所が違ったり、ルール上も別に交ざる必要はなかった。でも先ほど説明したとおり、僕らのサッカーというのは、ゴールキーパーは普通に目の見えている人、それからコーラーやコーチを含めて、目が見える人がいないと成り立たないルールなのです。

では、どのような人にそのポジションに入ってほしいかという、当然サッカーをやっていた人なのです。僕らはサッカーを通じて、サッカーセクターとってしまおうとちょっと言葉が悪いかもしれないので、サッカーセクターの人と障害者セクターの人たちが、意地でも出会わなければいけないのです。しかし、この出会いというのは、結構現場レベルで見るとすごく難しく、言葉が違うのです。ビジネスと福祉が違うように、サッカーと障害者福祉も、障害者福祉の中での文脈の中でも言葉が違ってたりするし、立場が違ってたりする。障害者スポーツは障害者の福祉の人たちが職務の一環として支えてきたという歴史がある中で、「僕ら、サッカー好きだよ。なんかブラインドサッカー、面白そうじゃん！」という目の見えた若者、僕もそのみんなと同じ立場にいたのですけれども、それだけの理由でかかわろうとすることに、やはりアレルギー反応などを起こすのです。でも僕らは交ざらなくてはできない、一緒にならなければできないという意味では、すごく良質な仲間作りの環境だったりします。

4番目が「成長系」とっているのですけれども、自分とチームがともに成長できること。今見たプレーは、8年前、今の僕らのトッププレイヤー、ノーバウンド、バウンドしながらボレーシュートなどもダイレクトに打ててしまう選手がいますが、その人たちからしても、もちろん石井もそうです、石井からしても、「こんなプレー、できないだろう」とだれもがいていたし、当事者たちも思っていたのです。そのような中で、やってみたら意外とできた。「みんな危ないからやっちゃいけないよ」といわれていたけれども、挑戦してみたら意外とできたし、自分だけ上手でも全然成り立たないのだなということがわかってきた。サッカーをやっていると当たり前なのですが、ほかのメンバーも含めて、チームの一人ひとりが8割の情報を補い合わなければできないからこそ、自分と一緒にチームメイト、あるいはゴールキーパーの晴眼者とかが成長し合わなければいけないという、そのようなところが、ブラインドサッカーの魅力なのかなと思います。

ブラインドサッカーの本質

【松崎】ブラインドサッカーは、パラリンピックの競技にもなっています、この8月には世界選手権に出ます。だから日本代表を応援してくださいというのは簡単なのですけれども、

僕らはあまりそのようなことを言わない団体なのです。もちろん、たまに言うのですけれども、言わない。なぜかといいますと、それは僕らのスポーツの本質ではないからだというように思っているからなのです。この自由であることであつたり、サッカーをやっている人と障害者が自然に交ざれること、それが僕らのビジョンではないかということで、これはすごくボトムアップで作っていったビジョンなのですけれども、サッカーを通じて視覚障害者と健常者が交ざることなのです。交ざるとは何なのと、すごく漠然とした概念なのですけれども、あえて僕らは共生とか、ちょっとカッコいい言葉を使っていないのです。サッカーで汗まみれになって、一緒にああでもないこうでもない、僕と石井もそうなのですが、ピッチの中に立てば、障害者だろうが目が見えていようが関係なくて、けんかもできるし、僕はよくチャリンコをけるのですけれども、チャリンコだってけてもいい、そのような間柄になれるというのが、僕らのいうところの「共生」ではなくて「交ざる」というようなニュアンスなのかなというように考えています。

交ざるときの課題は何なのだろう、ということも僕はちょっと整理してみると、1つは視覚障害者が孤立しがちな障害者であることということがまず一つあるのかなと思います。身体障害者は370万人といわれている中で、32万人ぐらいが今視覚障害者といわれているのです。そのうち80%が40歳以上、すごくご高齢のかたに多い障害なのです。緑内障や糖尿病など聞いたことがあると思うのですけれども、年を取るとかかりがちな病気で、多分お父さん、お母さんにはいないかな、おじいちゃん、おばあちゃんなどでかかりやすい病気に併発して視覚障害というのは生まれてくる、そのような病気だったりするのですね。そうすると、若い視覚障害者が少なくなっていて、しかも単一障害児といって、視覚障害者だけは一般の学校に通っていたりすると、意外と視覚障害者というのは変な話なのですけれども、世の中でどこにいるのか分からない状態に今なってしまうのですね。地域で視覚障害者が支え合えるカルチャーが作られていけばいいのですが、残念ながらまだ日本ではそのような段階ではなくて、結果として、ちょっと孤立してしまっているという背景があつたりします。

それから2点めが、視覚障害者のサッカーが知られていないという現実があるのですけれども、今までの小中高でサッカーゴールがなかった学校はありますか？女子校だとないかもしれないのですけれども、大体あるのですね。学校教育の中でサッカーは単元としても取り入れられています、でも盲学校では、4年前までサッカーゴールがあつた学校が0校なのです。盲学校にはサッカーゴールがなかった、僕はこれがすごく衝撃だったので、すね。

僕の原体験なのですけれども、青森盲学校だつたかに行つたときに、小学校3年生の女の子が、「じゃあ、これからボールをけてみるよ」とこのボールの音を鳴らして、「けてみよう！」といって、けてもらったのですけれども、質問の手が挙がつて、その子から。「すみません、ボールって、けていいんですか？」と聞かれたのですね。僕的には結

構衝撃な質問だったのです。彼女は目が先天的に見えなくて、目からの情報が入ってこなくて、盲学校の学校体育では、ボールというのは基本的に手で扱うスポーツなのだということを教えられてきたのですね。けるという行為を今までやったこともなかったし、想像したことすらなかった。その子たちが、たくさんではないのですけれども全国にいる。そのような子たちに、僕らは「ボールをけるって、結構楽しいんだよ」ということを教えてあげるといのは、大事な役割なのではないのかなというように思っています。

それから交ざるといことを考えると、視覚障害者のためばかりではないのですね。目が見える人たちも、いわゆる心のバリアのようなものをどのように打ち解けていくかということが、すごく大事だと思います。今日聞いている人たちで周りに視覚障害がいる人は、どのぐらいいますか？ では、障害者が周りにいる人、ご家族であったり、隣の人であったり、何人かいますね。

では今度は逆に聞くのですけれども、「田中さん+高橋さん+佐藤さん」が、知り合いにいる人？ 田中か佐藤、高橋、いずれか一つでいいですが、友達であったり、知り合いにいる人はどのぐらいいますか。だいたい挙がるのですね。実はこの名字の人の人口数と、障害者全体なのですけれども、人口数はほとんど同じだと、一度計算したことが僕はあるのです。結構後者と挙がるのに前者だと挙がらないとは、やはり交ざっていないのだと、僕は単純に思うのですね。実はごく当たり前の存在である障害者というのが、もちろん施設に入らなくてはならない場合もあるのだけれども、もっと交ざっていて世の中で地域が支えてもいいのではというようなことが、僕の問題意識としてあります。

今後の課題と戦略

【松崎】 時間が少なくなって来てしまいましたが、最後にサッカーを通じて僕らが交ざる手法として、どのようにして健常者を巻き込んでいくかということが、実はビッグイシューだったりするのです。もちろん、いきなり「来てください、参加してください」というよりも、もちろんメディアを通じて知ったり、あとイベントも僕らはちょっと特殊にやっていたり、出張事業と左上にあるのですけれども、学校の授業の中で取り組んでいたり。あとは企業研修。皆さんが新入社員で入ったら、もしかしたらブラインドサッカーの研修をやるかもしれません、また、フットサルをやりながらブラインドサッカーを体験しましょうであったり。最終的には僕らとしては、チームに加入したりボランティアに加入したりする付き合い方もある。でももっと低く、もっと健常者を巻き込んでいこうということが、僕らの戦略だったりします。

メディアも、国際大会に出ると大体取材はされるのですね。パラリンピックに出ます、世界選手権に出ます。でも、それに頼らないでメディアに出続けることが僕らは重要なのではないかというように考えていて、予選で負けてしまった、国際舞台がなかった2008年とかでも、1週間に大体2本ペース、今では4日に1件ペースぐらいでメディアには出ています。でもポイントはやはり、世界を目指していますということではなくて、今までお話し

てきたような、魅力をどう伝えていくかということです。

イベントも、障害者スポーツを行う隔離された場所というわけではなく、だれもが行きかう場所、皆さんであれば、立川とか、八王子とか、丸井の渋谷とか表参道、池袋のサンシャインでやったり、川崎の丸井さんでやったりとか、いわゆる若者が立ち寄るような場所で、普段は障害者にわたしたち関係ないと思っている人たちが、ごく当たり前、「あれっ、こんなスポーツあるの？ 何かちょっとすごいじゃん」というような、そのように見ってもらうことを意識していたりします。フットサル大会も同じです。皆さんの、普通のフットサル大会をわたしたちは主催しているのです。フットサル大会に来たら、お昼休みの30分間にブラインドサッカーの体験がついてくる。当然サッカーの好きな人たちの集まりなので、それも面白がってくれるし、わたしたちが伝えたい魅力について、よく理解してください。

ちょっとお金の話まで今日は行かなそうなので、最後になりますが、今一度僕らがどうしても避けて通る事のできない課題として、やはり一番は障害者への誤解や理解する機会自体がないことだと思います。障害者スポーツを再現しようという何か特別な場所ではないですか、今でいうと。だからこそ、障害者スポーツ自体は認知機会が不足していて、障害者スポーツというものはますます隔絶化、孤立化するようなことが、この50年の歴史だったのではないのか。障害者を啓もうする団体やよい活動はほかにもたくさんある中で、僕らができることは、やはりスポーツを通じて一緒に障害者と汗を流しながらみんなができることだと思うのです。その良質な体験機会をうまくたくさん作っていくことで、ユニバーサルスポーツとして一緒に交ざってできるのだと、一緒にできれば、ものすごく理解が進むところだと思うのですね。それが僕ら、ゆくゆくは、社会での障害者との交ざり合いにもつながるし、僕ら組織的には独自財源にもつながっていくようなロジックを持ってやっています。

ちょっとマネジメントの話はあまりできなかつたのですが、このようなところで、一度田中先生にマイクをお返ししたいと思います。

田中：ありがとうございます。松崎さんにもう一回ちょっと振ってもよろしいでしょうか？ お話の中で、やはり障害を持っている人たちの心の壁などという話もあったのですが、松崎さん自身がこの障害者スポーツといわれる分野に入ってきて、しかも今専任で事務局長をやっているわけなのですけれども、何かきっかけというものはあったのでしょうか。

松崎：障害者スポーツで生きていくということは、多分5年ぐらい前まで、結構ありえなかったことだと僕は思っているのです。それこそ福祉の体育の教官が職務の一環として、障害者スポーツを支えてきた。ご家族のかたが障害者スポーツを支えてきた、という程度

だったのです。やはりそれは、時代環境が変わってきたこともあるし、今のような、交ざり合いのようなことがすごく進んできたのだらうと思うのです。実際、僕にも身の回りに障害者がいて、視覚障害にすごく理解があったかという、全くそのようなことはなくて、皆さんと同じような感じで学校に行っていましたし、僕の、皆さんのころの夢はジャーナリストになることだったのです。僕は週刊ダイヤモンドの記者になるためにダイヤモンド社に入っているのですけれども、結構夢には向かって、近づいていたのです。

本当に一番最初の僕の原点は石井さんとの出会いでしょうか、石井さんたちがやっているプレーをまず見に行ったのですね。今では考えられないぐらい下手っぴだったのです。トラップもできない。でも、僕もサッカーは好きだったしやっていたけれども、「なんで目をつぶってやるんだらう」とか、目をつぶって自分が動けるかといったとき、動けなかったりするわけですね。自分ができないことに、この人たちは挑戦しようとしている。それは障害者だからではなく、自分もその状態になれるわけだし、それは結構、何かすごいという、当時はすごいという言葉しか思い浮かばなかったのです。多分、その当時の僕が今ここに来てプレゼンすると、「すごい、すごい、すごい」と、多分30回ぐらい言うのですけれども、そのぐらい、感覚的に何かを得たのですね。それで石井さんと活動を一緒に、二人三脚で始めました。

例えば、校庭の真ん中にみんながアイマスクをして立って、目の前30メートルは何もありませんといったときに走れるかという、実は走れなかったりするのです。何もないと分かっている、理屈では分かっているでも走れなかったりする。つまり何がしたいのかという、僕らは結構自分で当たり前に限界を敷いてしまって、「障害者だったらこれぐらいしかできないだらう」とか、「僕だったらこれぐらいしかできないだらう」とか、「こういう仕事の中では、これぐらいがリミットだらう」というように簡単に考えてしまうところを、視覚障害を持っている石井さんというのは当時、何も考えずに、いい意味でばかだったと思っていますのです。本当に体当たりをしていくのです、どんどん、どんどん。それを間近で見ている、「おれ、何やってるんだらう」と単純に思ったのです、僕、大学3年生だったのですけれども。そこで石井さんの「日本選手権やりたい。世界の舞台に立ってみたい」という思いを、何か分からないけれどもその情熱に巻き込まれて、手伝っていた。

そうしたら手伝っている間に、「なんかおれも、もっとこういうことをやればいいのに」とか、「やっぱり晴眼者をどう巻き込むかが大事だよ」みたいなものが生まれてきて、実際にお金をしっかりと回しながら、組織としてやっていかなければいけないという形で、2年間ぐらいサラリーマンをやりながらいろいろと考えたり、事業プランを練ったりして、独立して辞めたという形を取りました。

田中：ありがとうございます。石井さんにもちょっとお伺いしたいのですけれども、学生と話していると、障害を持っているかたと接していいのかと、正直ためらいを持っていたりとか、またもう一つ、ボランティアなどをやることによって、自分が何かいかにもち

よっと上の立場に立って、相手を見下すのではないかと不安などを結構いつてきたりすることがあるのですけれども、石井さんは逆に、いわゆる晴眼者といわれる人たちと一緒に、今も協会のマネジメントなどをやっていらっしやっていて、障害を持っている本人として、いわゆる視覚に障害がない人たちとかかわって一緒に仕事をすることは、どうお考えですか？

石井：これは全くのフラットというわけにはいかないと思うのですけれども、できないことはできないとはっきり言って、仕事を進めています。その中で、やはり僕らができることを最大限やるということを、この仕事の中では心得ています。それができないのであれば、ほかの人にやってもらうということをきちんと明確にして、言うようにしています。

あとは、町中でも声を掛けられるのですけれども、やはり慣れているところだと大丈夫なのですけれども、ちょっと行き方が不安だなというときに声を掛けてもらうと、非常に楽しんだりするのですね。僕もイングランドに一人旅に行ったのですけれども、イングランドのほうが実は声を掛けてくれる率が高いのではないかと思います。コンサートで隣に座った人とずっとコンピューターの話をして、どのようにしてスクリーンリーダーが動いているのかについて話をしたりしました。日常生活の中では非常にフラットですが、仕事の中では、うまくすみ分けをして、作業を行うことが大切だと思います。

田中：では、ためらいとか、そのようなものはあまりお持ちではないというように理解してもよろしいのでしょうか？

石井：本当に、視覚障害者になって非常にエキサイティングで、本当に毎日楽しく過ごしていて、これは本当にうそではないのです。神戸からある日帰るときに、自由席の新幹線に座っていたのですけれども、おじさん3人組が座ってきたのですけれども、どこかで声を聞いたことがあるなと思って、新幹線で寝ていたのですけれども、横浜辺りで、「僕は品川から成城までタクシーで帰るから」と、「いや、リッチな人もいるのだな」などと思ってよくよく声を聞いたら、指揮者の小沢征爾さんだった。気がついて、「全く僕は目が見えないのですけれども、小沢さんですか？」といったら、「はい、そうです」といって、ブラインドサッカーの話で盛り上がったという思い出があります。

田中：ありがとうございます。次に協会の中で、いわゆるインターンの学生を採っていたりだとか、障害を持つ人、持たない人が共に働く場を提供したりということを考えていらっしやるようなのですけれども、松崎さんとしてのお考えの方向性、それからその逆に一緒に働くことのメリット、そこから得られるブラインドサッカーのまた新たな可能性のようなことがもしありましたら、教えていただきたいのですが？

松崎:はい。人をどのように雇っていくとか、どのように働かせていくかということは、結構重大な課題だったりするのです。単純に、例えばなのですけれども、400万円のお給料で雇おうとすると、社会福祉の費用などを入れると、大体700万円ぐらい雇う側としては必要だったりするのです。もちろん700万円などは、僕らは年間の予算は大体3,000万円ぐらいなのですね。3,000万か2,000万ぐらいの間を行ったり来たりしているのですけれども、そのような中でそれだけのお金はできないのですけれども、わたしたち今常勤が3人いるのですね。3人はお給料をもらわないで働いているのかというと、2人は実は企業からの出向で来ていたりします。専属で僕は雇われているのは僕1人で、石井さんも専属なのですけれども、日立コンサルティングから今出向で来ていますし、もう1人の目が見える人も出向で来ています。なぜ出向で来ているかということ、ここで働くことが企業にとってトレーニングになるというように、とらわれているからなのですね。

ここはどのような場所かといいますと、常勤者3人と、あとインターン、皆さんと同じ学生なのですけれども、インターンが今5人いるのです。インターンといっても、週1日来て1か月間やってみるとかではなくて、お休みの間は週5日間、勤務時間は決めないのですけれども、基本的に成果主義なのですね。これをしっかりと終わらせて、ここで成果を果たすのが君の仕事というような位置付けをしているので、週5で大体みんな来なければいけないぐらい、仕事に対してコミットをする。やはり皆さん、就職に迷っていたりだとか、これからどのようにしていこうかと迷われる中では、一度そのような社会の中でいろいろな働き方をしてみるといことはすごく大事だと思います。僕らからすると、そのようなやる気を持った人でもスキルは実はなかったりするのだけれども、その気持ちがすごく伝播をしていくのです。社会人のボランティアも20人ぐらいいて、ちょっとクレージーな人が多くて、週5日仕事が終わってから夜9時から11時までを週5日来ていたりとかです。その人たちがなぜ、そのようなことができていくかということ、若い人たちがそれだけ熱意を持ってやっていて、わたしたちもそれに対していい影響を受けていて、それに対してスキルでフォローをしてあげたりとか、そのような循環が回っている組織なのではないかなと思っています。だからすごく僕らの組織の中では、気持ちを持った学生さんとかが大事なギアの中心、一番小さなギアなのではないかなというように、僕はとらえていたりします。

実は、今インターンを募集しています。ちょっと集まりが悪くて、NPO法人のETICというところを聞いたことがあるかもしれないのですけれども、ここと一緒にやって募集をしているので、もし興味がある人は、このあとETICか、わたしたちのホームページから問い合わせさせていただきたいな、というように思います。

それからごめんなさい、PRになってしまうのですけれども、今日本大学や慶應大学などでも、僕らの地域の大会を、大学の校舎の中でやって、大学生と一緒にこのスポーツを広げようというような企画もしています。それはそこに所属する大学生の熱い気持ちがないと、全然できなかったりするのです。僕らはすごくフットワークの軽い団体を自称しているのです、「松崎さん、石井さん、こういうことをやりたいんですけど、中央大学でこうい

うことをやりたいんですけど」というようなことの持ち込みというのは大歓迎なので、インターンまでいなくても、自分の将来の中で「こういうチャレンジしてみたいな」というのが大学内でもしあれば、ぜひ名乗りを上げてほしいなと思っています。

田中：今お話を伺っていると、何となく障害者だからとか、障害者ではないからというよりは、本当にサッカーが大好きな人たちが集まって、しかもその中で、お互いの得意不得意なところをカバーしあいながら、本当に本日のシンポジウムタイトルにもある多様性を生かして協会のマネジメントも行っていると理解させていただきました。

実際に、皆さんもしよかったら、この日本視覚障害者サッカー協会のホームページで見てください。本当にすごいです。まず私自身が障害者スポーツのほうを研究、実戦にも実際にかかわったりしているのですけれども、例えばオリジナルグッズを販売されていたりとか、それからボランティアのかたたちの集まるグループなどがサイトになっていたりとか、今お越しになっていらっしゃる松崎さんのブログがあったりとか、非常に広く、本当にマネジメントとして、しっかり頑張っているところがあるなというのが伝わってきます。

前のスライドでもちらっと映ったのですけれども、皆さんの今日お手元にあるところであれば、いろいろな会社が協賛していたりスポンサーになっている。これはいわゆる社会の起業のCSR、社会貢献活動の中でも一環として扱われていますし、逆にいえば、企業はこのようなところに名前を出されることで、また企業としてのメリットもある。いろいろな意味でお互いのいいところをつかみ合っているマネジメントもされているのではないかなというように感じております。

そろそろ時間もあるので、一度学生のかた、それからもしくは会場にお越しいただいているかたから、おふたりにご質問などがありましたらと思うのですが、いかがでしょうか？

Q&A

質問者：では質問させていただきます。おふたりのどちらかで答えていただきたいのですが、このブラインドサッカーというものを僕は今日初めて知ったわけですが、このブラインドサッカーは世界中にはあるわけですね、ブラインドサッカーの強豪国というのは、いったいどのような国があるのでしょうか。教えてください。

石井：ブラインドサッカーの強豪国といいますと、やはりワールドチャンピオンシップに勝っているアルゼンチン、それからブラジルですね。南米ではこれら二つが強豪です。それからヨーロッパチャンピオンを取っているフランスや、それからあとはイングランド、スペイン、このあたりが力を入れていますね。特にイングランドはFA、フットボール・アソシエーションとイグレーションが強くて、障害者スポーツに対して15億円のバジェットを持っていて、本当に協会と密に連携していて、そこはすごく進んでいる国だと思います。

す。力以上にそのようなところが強いと思います。

質問者：わかりました。やはりそのような国というのは、サッカーが強いからこのようなブラサカにも力を入れているということになるのでしょうか？

石井：これは難しい問題に、卵が先か鶏が先かという問題があるのですけれども、ブラジルの一選手は、昔は音のないボールでやっていた。ブラインドサッカーのボールができて、ブラインドサッカーで音が出るボールができたら、全然問題なくプレーができるというような選手がいるのです。だから、やはりプレーする環境など、そのようなこともあると思うのですけれども、やはりプレーする意思や、プレーするお国柄などは非常に関係が強いと思います。

質問者：ウェブページのほうで、いずれは11人サッカーをやるというような企画があったと思うのです。こちらは実現可能なのでしょうか？

松崎：すごいマニアックですね、それは。今5人制サッカーなのですね。ミニサッカー、フットサルと同じなのですけれども、それを11人制のコートに広げられるかということが「夢企画」という、「僕ら、こんなブラインドサッカーができるんじゃない？」、「ブラインドサッカーでこんなことができるんじゃない？」みたいなものを、ツイッターで募集したのです。その中で挙がってきたのが、今の意見です。

11人制になるとどのようなことが起きるかという、当然、声がまず聞こえにくくなる。それからボールの音が聞こえにくくなる、ピッチが何倍になるのだろう、すごく大きくなるので。ということがあって、なかなか懸念材料が先立ってできていないという形です。協会としては、まだ取り組む予定はないのですけれども、選手の気持ちとお試し感があれば、多分できる企画なので、これはどこかでやろうよという話は、ちょっと下のほうではふつふつとしているところです。ただ、具体化はされていない感じですね。何か企画をいただければ、ぜひ。

田中：はい。実はこの前の11日、横浜の桜木町の駅のそばに、「キャプテン翼スタジアム」というのがあるので、そちらのほうで「ユニバーサルフットボールジャム」という、大きなイベントが開催されていました。このイベントでは、いわゆる一般の競技選手ですね、サッカー選手が社会貢献を支えるということが一つの課題ということと、それから、ユニバーサルということで、さまざまなサッカーを知ってもらおうという企画だったので、そこには知的障害を持つかた、脳性まひという障害を持つかた、それから聴覚障害という障害を持つかた、さまざまなかたがいらっしやっている中でブラインドサッカーの体験というものも行われて、皆さんご存じの世界カップの、この間ベルギーと

契約した川島などもいましたね。わたしはちょうど川島のすぐ後ろのゴールラインに立っていたのですけれども、アイマスクをした状態で、一緒に視覚障害のかたとサッカーを楽しまれていました。「いや、本当に、目で入る情報って大きいんだな」ということを、ぼそっとやはり川島が言っていたのですね。

でもそのような中で、コミュニケーションの取り方というのは必ずしも目だけではなくて、さまざまな言葉、聴覚、触覚などいろいろなものがありますけれども、これらのものを発揮することによって、よりコミュニケーション能力も高められるであろうし、さらに今日のお話の中の、キーワードの中でたくさん出てきました多様性ですね。いわゆるいろいろなかたと一緒に交わってといったときに、障害者だとか健常者とかそのようなことではなくて、やはり単にサッカーが好きという、そのキーワードが、わたしはとても、これからの障害者スポーツに必要なことではないかと思っています。「好きこそものの上手なれ」と言われる様に、やはり好きな仲間が集まって、面白いと思えたものというのはビジネスになっていくということが、これからの時代ではないでしょうか。

そのような意味も含めまして、今日のブラインドサッカーというものを推進されている、日本視覚障害者サッカー協会のマネジメントでの取り組みというものは、非常に興味深いところがあったと思っています。

一つ最後にお願いがあったのですけれども、今週末、八王子のほうでイベントがあるというように伺っています。皆さん、この日本視覚障害者サッカー協会のイベントの年間数はどれぐらいだと思います？ 実は先ほど伺ったのです。年間200だそうです。ということは、365日のうち、200のいろいろなイベントを行っているそうです。

松崎さんから、最後にアナウンスだけお願いします。

松崎: 中央大学と同じ八王子市の中で、この17、18、19の三連休、17日は実は調布なのですけれども、調布の飛田給にあるミズノフットサルコート、フットサル好きな人は分かるかもしれないのですが、そちらで午後から壮行試合があります。来月日本代表が、わたしたちイングランドで世界選手権をやるのですけれども、それに向けた最後の試合プラス、記者発表などもやったりするので、運営面などでも興味がある人にとっても面白いかなと思っています。18日は八王子富士森公園というところのフットサル場で、9時から夕方までずっと練習をやっています。試合もあると思います。19日はエコ・フットサル・パーク八王子、これは片倉のほうでやっています。ボランティア等も募集しているので、ウェブサイトを確認していただければなと思います。

田中: ありがとうございます。このような情報は全部、ウェブサイトに乗っております。8月に世界選手権があるということなので、ロンドンでのパラリンピックとあわせて、ご活躍を祈願しております。

演者紹介：

石井宏幸氏（日本視覚障害者サッカー協会副理事長）

1972年生まれ。2004年に日本視覚障害者サッカー協会副理事長に就任。
28歳で緑内障により失明。2002年、日本代表による初めてのブラインドサッカー国際試合となった韓国vs日本に出場、背番号10番を付ける。2008年より㈱日立コンサルティングの社会貢献の一環で日本視覚障害者サッカー協会に出向、現在に至る。

松崎英吾氏（日本視覚障害者サッカー事務局長）

1979年生まれ。学生時代に偶然出会ったブラインドサッカーに衝撃を受け、深く関わるようになる。大学卒業後、(株)ダイヤモンド社やベネッセ・コーポレーションなど一般企業での業務の傍らブラインドサッカーの手伝いを続けていたが、「ブラインドサッカーを通じて社会を変えたい」との想いで出版社を退社。個人会員の立ち上げやスポンサー集めなど、ブラインドサッカーの普及に奔走。

田中暢子氏（中央大学文学部兼任講師／コーディネーター）